
銀魂－新－

亞人子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂—新—

【Zコード】

N7843E

【作者名】

亞人子

【あらすじ】

銀魂の第2弾ツ！新キャラの登場の仕方は……クビになったサラリーマン！？

夜中にぶらついたら良い事はない

とある夜のこと…

「ふん…ふん…ふん…鹿のふん」

毎日の定番である酢昆布買いの帰り、チャイナ服を着た神楽は万事屋に帰る道を歩いていた。

既に深夜になつていて、道周辺には人影が全くなく静かである。

「……本当静かすぎてつまんないアルよ。日本は何をやつてるアルかー！」

口に酢昆布一枚喰わえながら誰もいないのを良い事に大声で愚痴を漏らしている。

「ふああ～、やつぱこ～いう時は酢昆布に限るネ。……ン？」
欠を零していると、神楽は電柱に寄りかかっている見慣れない人影を見つけた。

「んー？ 失業したサラリーマンの寝床じゃねエぞ～」
「」

神楽はその人影に歩み寄った。するとそこには

「血だらけアル……」

血に溺れそうな人間が寄りかかっていた。既に意識はないようだ。

「やばいアル……速く運ぶヨロシ！」

そう言つと神楽はその人間を背負い、脱兎の如くその場から去つて行つた。

「ふつあああ～、神楽ちゃん遅いですね…」

「ふつああああ～、銀ちゃんもう我慢の限界だよー」

万事屋に在るワイン色のソファに寄りかかって、銀時と新八は神楽の帰りを待つていた。

「大体、神楽ちゃんを一人で買い物に行かせるのがいけないんですね」

「

「馬鹿か君は。あんな怪力少女が襲われるわきやねーよ」

「でも実際、神楽ちゃん遅いじゃないですか」

新ハは時計を氣だるく見上げ、「ほらもう一時ですよ」と銀時に告げた。

「あああもう無理、銀さん寝る」

銀時はソファに横になつた。眼の下にはやはり隈ができている。

「寝ちゃダメですよ。寝るんなら僕家に帰ります」

「あーウソウソっ！ 銀さんまだ起きてるよ、ほーらあ」

慌てて銀時は起き上がつた。新ハは「怖がりめ……」とボソッと呟いた。

ガラララ…

玄関の開き戸が開いた。

「あ、神楽ちゃん？ 遅いよ「大変ネッ！ 人が倒れてたアルッ！」

新ハは「え？」と呟き、神楽が背負つているものを見た。

「な、何それ……人？」

「当たり前ネッ！ そつとぼけてんじやネエよッ！！」

「てなんで拾つてくるの！？ やばいじやんその人ッ！」

「外は寒いアル。だから連れて帰つたネ」

「よく余裕綽々と言えますねッ！？ 死んでたらどーすんですッ！？」

？」

「……煩いよー君達」

新ハと神楽が玄関で言い合ひをしていると、銀時が急そうに出て來た。

「銀チヤン、コイツケガしてるアルよッ！ 助けるアルッ！」

神楽が指した箇所には、刀で切られ、痛々しくも血が垂れている。

「つて言つてもなあ…此処には包帯と消毒液的なモノしかねえよ…」

「しうがな「それだけありやー十分だよ」

新ハが言い終える手前に声が聞こえた。良く聞き覚えのある声であ

つた。

「お登勢さんっ！？ なんでここに？」

その声の主 つまりはお登勢は万事屋の開き戸に寄りかかっていた。

「あんた達が煩かったから叱りに来たんだよ……」

観念した様にお登勢は「全く……」と付け加えた。

「ババア……」

「ほら、ぼさつとしてる暇はないよ。早くこの仔を運んでやんな」

「助けんのか？ ババア」

銀時はお登勢の登場にはつきり目が覚めた様だ。不思議そうにお登勢を見ている。

「悪いがあたしゃケガした人間を放つて置けねえ性分なんだ」

「……変わつてねえな」

銀時は鼻で笑うと、気を失っている人間を軽々持ち上げた。

「神楽は熱いお湯を炊いとくれ。新ハはスナックからタオル5枚持つといで。急ぐんだよ」

「「りょーかいッ！！」

三人共自分達の仕事に取りかかった。お登勢は満足そうに笑んでからケガの手当に向かつた。

「ん……？」

「？ どうした？」

お登勢の反応が気になつた銀時が聞いた。

「いや、何でもないよ。それより、タオルを湿してくれ」

「ああ」

ケガしている人間の腕の傷をお登勢はじつとみた。

「（この仔……自分で傷を治して……）」

その人間は息を荒げているのだが、その度に傷が癒えて行つているのだ。

確かに最初の時よりは大分出血も治まつてきているが、ここまでとは

「ババア、そいつ大丈夫か？ 息荒くねえか？」

銀時が戻ってきた。心配そうに怪我人を見ている。

「ああ、大丈夫だ。取りあえず今夜寝れば目を覚ますだろうよ」

「マジか！？ そんな速いの？」

「この仔は、だけどね」

お登勢の最後の言葉をその時の銀時は聞き逃していた。

「ババア、アイツ生きてるアルか！？」

「ああ。でも今夜はよく寝させてやれ、な？」

神楽は笑顔で言った。

「当たり前アル！ 任せるアルよッ！」

「本当にありがとうございました、お登勢さん」

お登勢は玄関の開き戸を開けた。

「良いって事よ。でも家賃にツケとくからね

「う……」

そういうてお登勢は万事屋を後にした。

「さてと……看病はどうしますか、銀さん…… つて早ッ！ 寝るの速いよアンタ！」

新ハは銀時が寝ているのを呆れながら見た後、怪我人が居る部屋へ向かつた。

「神楽ちゃん、ぐれぐれも騒がな「しーっ！ 静かにするアルッ！」

神楽が静かに言った。怪我人は眠りに堕ちている様だ。

「眠くなったら銀さんを起こして下さいね……じゃ、おやすみなさい」

「わかったアル、じやな、ダメガネ」

「……新ハですつて」

そう言つて新ハは万事屋を後にした。

「助かつて良かつたアルね……」

そう言いながら神楽は落ち着いた少年の顔を覗き込む。するとまだ顔と髪に血の跡が残っているのに気付いた。

「人は顔アル。綺麗にするヨロシ」

湿らしたタオルで少年の顔や髪を拭いてあげた。あまり経験がない

のか、慎重に拭いている。

血を拭くと、今までよく見れなかつた少年の顔が露になつた。

「……起きたら酢昆布あげるネ。だから早く治すアル」

神楽はそういうと酢昆布を一つ喰わえた。

「……んん……ふああ～、何？ もう朝？」

青白い月光のせいか、銀時は日を覚ました。時計を見るとまだ四時である。

「まだ朝じやないじゃん。つかまだ全然寝てねえ……」

再び寝転がり、寝よつと脳に指令を出してみたが全く言ひ事を聞かない。

取りあえず立ち上がり、そいつえば……と思いながら少年が寝ている和室の障子を開けた。

「おい神楽あ、看病交代～ってやつば寝てるよな」

神楽は少年の横に添い寝するように眠っていた。

「ほり神楽つやーん、起きて下さ～～～でか、寝るんならあつちで寝て下さ～～」

銀時は神楽を揺さぶつたが、なかなか思う様にいかない。

「寝る子は育つつーけど、お前は育ち過ぎだよ、おーい」とにかく神楽を抱え、ソファに持つて行つた。神楽はよく眠つている。

「全く……看病して寝る奴あるか」

銀時は和室に入り、障子を閉めた。

「つたくよ～、呑気に寝ちゃつて」

少年の布団の横に肘を立てて寝転んだ。少年は軽く握り拳を顔に近づけた状態で、完全無防備である。

銀時はふと少年に顔を近づけた。

ちょうど障子の隙間から差し込んで来る青白い月光に少年の柔らかい金糸と白い肌が輝いている。

その白い肌に似合つ艶やかな唇からは甘い吐息のような寝息が心地

よく聞こえる。

夜の支配する悪魔でさえその天使の様な儂い寝顔の前では息を呑む程である。

銀時は無意識のうちにその少年の頬に触れた。

「（うつわあ、超ふにふにしてるーっ！　なにコレ？　マシユマロ？）」

あまりの新感覚さに感動したのか、銀時はふにふにをなかなか止めない。

「……………ん…………」

銀時ははっとした。確かに自分の名前を呼ばれた気がしたのだ。

しかし少年はわつきと同じ様にすーすー寝息を起してながら寝ている。

「氣のせい…………か」

少年の寝顔を見ていらううちに銀時も次第に眠りに落ちて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7843e/>

銀魂－新－

2010年10月9日06時00分発行